

【研究者】

坂田邦子

(助成決定時) 東京大学 社会情報研究所

【研究題目】

アジアにおけるメディアの多様化と文化的共生に関する実践的研究：
フィリピンと日本の学生による共同番組制作を通じて

【研究の目的】

「アジアの世紀」とも言われる 21 世紀に入り、政治経済のあらゆる領域において「アジア」という共同体としての意識が高まる一方で、多様な文化の共存が望まれるアジアのメディア環境を社会文化的な側面から再構築していくための可能性と問題点について、学術的かつ実践的な視点から検討することを目的とした。歴史社会的に構築されてきたこれまでのアジアのメディア文化のなかで、ある種の支配的な意図によって歪曲され偏向した異文化表象・他者表象に対し、殊更に必要とされているのがメディア・リテラシーである。本研究では、異文化表象・他者表象に対するクリティカルな視点、異文化表象・他者表象ではなく、自ら自文化を表象し、主体的に発信するという視点を持ちながら、実際に異文化間における共同映像制作を行い、文化的差異や異なる価値観をぶつからせながら映像表現を行うことで、多文化的なメディア環境におけるメディア・リテラシーの問題とともに、映像メディアによる多様な文化や価値観の表現についての問題点を明らかにすることを目的とした。

【研究の内容・方法】

以上のような問題意識に基づき、フィリピンと日本の大学生による映像の共同制作とともに、これと連動した 2 回のワークショップを行った。また、この間、ブラックボード・システムという e ラーニングのシステムを利用して、インターネットを通じたディスカッションや映像の交換を行った。研究としては、これらの一連の実践自体を対象として、観察・評価するという実践的な方法をとった。

< 映像制作 >

本研究は、大学生による映像制作が研究の主軸となっている。日本側は、神田外国語大学のメディア・コミュニケーション論の授業を履修した学生、フィリピン側は、サントトマス大学のトマシアン・ケーブルテレビの学生が、それぞれ 3 つのグループに分かれて 5 分ずつのビデオクリップを制作した。1 月末にはフィリピンの学生が来日し、各グループがペアになって、共同でフィリピン・日本の 2 つのビデオクリップを組み合わせ、最終的に 15 分の番組を 3 作品完成させた。テーマとしては、身近で日常的なことから異文化について考えてもらうことを目的として「食文化」を設定した。このテーマの中から各グルー

ブが個別のトピックについて映像制作を行った。

<ワークショップ>

第一回目として10月中旬にメディア開発教育センターにて、インターネットによるオンライン・ワークショップを行った。制作前に、フィリピン・日本のお互いのメディア文化・メディア環境に対する理解を深めることが目的であったが、技術的な制限もあり、結果的にはお互いの自己紹介とトピックの紹介だけで終わってしまった。これに対し、第二回目は、一週間の共同制作の後、制作した映像の上映会を行い、完成した作品について、またはこれらを通じて、映像におけるステレオタイプの問題や、それぞれの国の映像文化の歴史的な背景などについての活発なディスカッションを行った。

<オンライン・コミュニケーション>

ブラックボード・システムを利用して、グループごとのディスカッションを行いながら、テーマについて相談したり、互いの文化について質問しあったりしながら、日本人にもフィリピン人にも楽しんで見てもらえるテーマや表現について考えた。

【結論・考察】

学生たちによる一連の実践を通じて、興味深い多くの発見があった。映像制作という実経験として他者の文化を表現することにより、学生たちは実際に映像表現におけるいくつかの問題点を見出した。例えば、日本におけるフィリピンの悪いイメージを変えるためにレストランやパブで働いているフィリピン人を取り上げたチームは、日本でフィリピンのイメージが悪いということを映像にすることで、フィリピンの学生に不快感を与えないだろうかという不安を持ったが、その後の共同作業とディスカッションを通じてフィリピンの学生と理解しあい、信頼のもとに他者表象が可能になるのだということを示してくれた。また、同じアジアにありながら、フィリピンと日本では映像文化が非常に異なることに気づき、その背後に歴史文化的な背景があったことも明らかになった。作品について言えば、フィリピン人と日本人のMCがそれぞれの文化を紹介しながら番組を進行するという、従来の日本のテレビ番組にはない新しい手法を用いることで、映像メディアにおける文化的共生の可能性の一片が見出されたと考えられる。

学生にこのような異議を意識化させる仕掛けが十分だったとは言えず、研究者側が考えていたほどの学びが学生側にもたらされたかどうかという点については反省の余地がある。ただし、本研究は次年度以降も引き続き行うことが決まっている。今後さらに経験と知見を積み重ねていくことで、アジアにおけるメディアの多様化と文化的共生への展望をはっきりさせていきたい。